

低年次生を対象とした中短期海外学修の可能性と課題 —神戸 GCP シンポジウムを手がかりに—

Good Potentialities and Next Issues of Short-term Overseas Program Targeted for 1st Year and 2nd Year Students

友松 史子 (神戸大学 大学教育推進機構 特命助教)

要旨

神戸グローバルチャレンジプログラムシンポジウムは、神戸大学における海外での学外学修の取組による成果と課題を考察することを目的とし、2018 年 11 月 3 日、開催された。

当日は、本学のグローバル人材育成に向けた特色ある 2 つの取組を取り上げ、参加学生による学外学修の活動成果報告発表及び「海外での学びをどう活かすか」と題したパネルディスカッションを通じ、彼らの発言を聞くことを軸に構成された。

これらの発表、発言から、海外での中短期間の主体的な活動に重点を置いた学外学修が、学びを促進させるだけでなく、現地で受ける衝撃により、考え方や意識を変化させ、中長期の視野で思考する力を養うという教育効果を上げていることが明らかにでき、本学が目標とする「課題発見・解決型グローバル人材」の育成に繋がっていることを示すことができた。

こうした学外学修を継続して実施できる体制を整えること、そこでの学びを上位学年での学外学修へ繋げる仕組み作り、そして、このような学外学修への参加を大学生・高校生により意識付けることは、本学の目指すグローバル人材育成をさらに牽引することになると考える。

1. はじめに

1.1 大学教育加速プログラム (AP) テーマⅣ「長期学外学修プログラム (ギャップイヤー)」について

神戸大学の「神戸グローバルチャレンジプログラム (以下、神戸 GCP と表記) は、2015 年、文部科学省「大学教育加速プログラム (AP) テーマⅣ 長期学外学修プログラム (ギャップイヤー)」 (以下、AP と表記) 事業に採択され、4 年目を迎えた。

AP は、社会において求められている人材が高度化・多様化している現在、大学の教育改革を推進し、学生の能力を最大限伸ばし、社会の期待に応えるため、これまで以上に教育内容を充実させ、学生が徹底して学ぶことのできる環境を整備することを目的に、先進的な取組を実施する大学を支援する高等教育改革プログラムである。テーマⅠからテーマⅤまで 5 つのテーマが設定され、全国の高等教育機関 77 校が採択されている。

神戸大学が採択された「テーマⅣ 長期学外学修プログラム（ギャップイヤー）」（以下、テーマⅣと表記）は、「社会人として必要な能力を有する人材育成」プログラムであり、1か月以上というある一定期間、学びの動機付けを得るためにキャンパスの外で学ぶことができる体制を整備し、学生が長期学外学修に取り組むことを促進する事業である。

本事業に採択された本学を含む12校は、各校ともクォーター制や入学猶予制度の導入といった学事暦の見直しを行い、学生が大学入学後、早い段階で一定期間、集中的に学外で主体的な活動に取り組む期間を設け、職業体験、社会貢献活動、フィールドワークといった学外学修を、殆どの採択校で全学対象に展開している。また、その活動成果を単位化し、学生のこれらの活動への参加を推進している。

1.2 教育改革と神戸GCP

本学では、「自ら地球的課題を発見し、その解決にリーダーシップを発揮できる人材（課題発見・解決型グローバル人材）」の育成を学士課程の課題として、2016年度より教育改革を行っている。

その一環として、学事暦に関しては、2016年度よりクォーター制を導入している。

また、本学学生が卒業時に身につけるべき共通の3つの能力、「複眼的に思考する能力」、「多様性と地球的課題を理解する能力」、「協働して実践する能力」を「神戸スタンダード」として定め、これを全学部生が身につけるため、従来の教養科目が見直され、「基礎教養科目」「総合教養科目」、さらに高年次学生を対象とした「高度教養科目」を設け、4年間を通じて学ぶ教養科目のカリキュラムを展開している。

このような教育改革の流れの中、2016年度から開始した神戸GCPは、「課題発見・解決型グローバル人材」の育成を目標に掲げる本学の教育の国際通用性の強化、質向上を目指す本学の教育改革の中に位置づけられ、それを加速するものと期待されている。

具体的には、1・2年次学生が国際的なフィールドで、多様な学外学修活動に取り組むことで、学びとは何かを考え、学びの動機付けを得るほか、課題発見・解決能力の必要性に気づくことができる。それにより主体的な学修を促進し、上位学年で、海外留学や長期インターンシップといった国際的なフィールドでの更なる活動にチャレンジする精神を育成することを目標としたプログラムである。

また、本プログラムでは、参加学生は学外での学修活動を経験するだけでなく、学外学修の前後に、事前学修と事後学修を実施している。事前学修では、学外学修での活動目標を設定し、何を学ぶかを明確にし、また、学外学修活動後の事後学修では、事前に立てた目標をどの程度達成できたか、何を学び、どのような気づきを得たかを振り返ることとしている。そして、各学修段階を経た学修成果については、「総合教養科目」の「グローバルチャレンジ実習」として単位を授与している。

1.3 実施状況から見る神戸 GCP の特色

2016 年度より神戸 GCP では主として海外での学外学修へ学生の送り出しを開始し、これまでに延べ 38 コースを実施し、約 330 名の学生が本プログラムに参加した。これまでの実施状況から見える本プログラムの特色としては、次の 4 点が挙げられる。

- ① 文系理系双方にまたがる全学的な取組
- ② 学外学修先は国際的なフィールドとしているが、実態は海外の学外学修となっており、活動先は世界各地に広がっていること。
- ③ 学外学修の活動内容が多様であること。
- ④ 学外学修を通じ、本プログラム独自に設定している 3 つのチカラ、「チームワーク力」「自己修正力」「課題挑戦力」が向上していること。

①について、参加学生の内訳は文系理系双方に広く渡っている。これについては、2018 年度の場合、理学部、工学部、農学部も学外学修コースを実施していることが挙げられる。

また、部局が開講する学外学修コースの場合、参加対象学生を、自学部生に限定していることもあるが、全学に開放されたものも多い。全学に開放された活動コースに、理系学生が多く参加していることも、特徴の一つとして挙げられる。本プログラム参加学生のうち、理系学生の占める割合は、2016 年度では 30%弱であったが、2017 年度以降、40%を超えている。

理系学生は自らの専門分野と関連性のない日本語教育、ボランティア活動、現地事情をリサーチするフィールドワークといった学外学修活動にも多く参加しており、理系学生の本プログラムへの関心の高さが伺える。

②の学外学修先については、採択校 12 校中 11 校は、国内のみ、もしくは国内及び海外双方で活動を実施しているが、本学の場合、現在のところ、学外学修先は海外のみとなっている。これはテーマⅣ採択校の中で特徴的な点であろう。

2016 年度より年を追うごとに実施コースが増えており、それに伴い活動先はアジア、欧州、北米、中米、オセアニアに広がっている。学外学修国は 2016 年度には 13 ヶ国、2017 年度は 21 ヶ国、そして 2018 年度は 19 の国と地域となっている。

続く③であるが、本プログラムの学外学修の活動コースは 5 類型に分けられている。すなわち、フィールドワーク型、インターンシップ型、サマースクール型、ボランティア型、学生企画型である。

学生企画型以外のコースは、本プログラム取組部局が企画・立案し、学生を募る「募集型コース」として開講されている。一方、学生企画型は、学生が自らの関心に基づき、学外学修先で取り組む活動内容や活動時期を計画し、渡航するという、学生の関心と主体性を最大限に引き出そうとするものである。

テーマⅣ採択校が展開する長期学外学修プログラムでも、このタイプの活動を取り入れている大学は何校かあるが、本学ではプログラム初年度より学生企画型のコースを実施しており、これまでに9件の活動に12人が取り組んでいる。

最後に、本プログラムで独自に設定している3つのチカラであるが、これは参加学生がルーブリックによって自己評価を行っている。

まず、参加学生は学外学修へ行く前の事前学修時に測定・評価をし、各自の段階を把握する。そして、学外学修から戻った後の事後学修でも再度、測定・評価する。これに加え、本プログラム参加年度の翌年度より卒業年度まで1年に1回、これら3つのチカラの自己評価を行い、経年変化を追跡し、分析している。

学外学修活動の前後で、各チカラとも、より一つ上の水準へいずれも高い率で伸ばしていることが確認できている。

2. 神戸グローバルチャレンジプログラムシンポジウムの実施

2.1 シンポジウム実施趣旨

前述のような実施状況を踏まえ、神戸GCPに参加した学生が、何を学び、その学びをどのように発展させ、国際的なフィールドでの更なる挑戦に繋げているのか、これまでの取組を振り返り、その成果を広く社会に発信することを目的に、2018年11月3日、神戸グローバルチャレンジプログラムシンポジウムを本学百年記念館六甲ホールにて開催した。

2.2 シンポジウムのキーコンセプト

「世界へ飛び出す学生たち」をキーコンセプトに、当日のプログラムは、学生による、学外学修の活動とその学修成果に関する報告発表を軸に構成した。

発表にあたっては、神戸GCPに加え、本学のグローバル人材育成に向けた特色ある2つの取組も取り上げている。

1つは、本学国際人間学部で展開されている、卒業までに同学部の学生全員、海外学修に参加することが必須となっているグローバル・スタディーズ・プログラム（以下、GSPと表記）で、特に、本学附属小学校と連携した海外学修活動を盛り込んだプログラム。そしてもう1つは、スーパーグローバルハイスクール（以下、SGHと表記）指定校である本学附属中等教育学校が、グローバルキャリア教育の一環として展開しているグローバル・アクション・プログラム（以下、GAPと表記）に参加した生徒の海外学修活動である。

このように本学のグローバル教育の一端を示すことにより、大学全体として、今後、グローバル教育を持続的に展開、発展させていく上での課題を検討する機会とした。

2.3 シンポジウムの構成

当日プログラムは3部から成り、第一部は教育界、産業界からお招きした4氏による基調講演、第二部は前記の各プログラム参加学生・生徒計5名による4件の活動報告と成果の発表、第三部は「海外での学びをどう活かすか」をテーマに、第一部で基調講演した4氏に加え、第二部で発表を行った学生・生徒5名をパネリストとして、パネルディスカッションを行った。

このほか、第一部終了後、会場横のホワイエにてポスターセッションを開催し、神戸GCP、GSP、GAPの各プログラム計15コースが、それぞれの学外学修活動の報告やその学修成果をポスターで発表し、海外での学外学修活動のアウトカムを知る機会とした。

以下では、第二部、第三部での学生・生徒の発言内容を中心に、海外での実践的な活動を通じ、主体的に考え、行動することに重点を置いた学外学修の意義や本シンポジウムの成果を見ていきたい。

2.4 本シンポジウムで発表を行った学生・生徒の学外学修活動概要

第二部の学修成果報告発表、続く第三部のパネルディスカッションでパネリストを務めた学生・生徒が取り組んだ学外学修活動は、先にも述べたように4件である。

神戸GCPからは2016年度、2018年度に実施されたコースから2件。1つは、困難な状況下にいる子どもの保護活動を行っているネパールの現地NGOで従事した、公立学校支援活動や子どもの保護育成活動といったボランティア活動である。ネパール都市部の公立学校には、学習面、家庭環境等に様々な問題を抱える生徒が多くいる。公立学校支援活動では、そのような生徒に対し、当該NGO相談員と共に面談を行い、解決策を協議したり、必要に応じて物資を支給するといった活動に従事したり、自身で企画した青少年活動を行っている。また、子どもの保護育成活動では、当該NGOが運営する、家庭や生活に問題を抱え保護された子どもたちが過ごす保護施設で、健全な心を育むために行われる音楽やダンスを共にするといったことに取り組んでいる。

もう1つの活動は、インドの日本語学校での日本語・日本事情教育指導補助のインターンシップである。ここでは日本語授業で会話の相手や字の書き方を指導するといった授業補助や教材作成、日本に関する一つのトピックについてプレゼンテーションを授業で行うといった業務に携わっている。

また、2018年度のGSPに参加した学生は、本学附属小学校の協定校であるオーストラリアの小学校での数日間に渡る交流や、その他施設への社会見学やフィールドワーク活動に参加する児童に同行し、学習支援を行い、国際理解教育への認識を深め、将来のグローバル社会を担う子どもたちを育成する教員となるための資質を磨くことを目的にした活動に取り組んでいる。

そして、GAPからは、カンボジア内戦とそこからの再生や教育問題等を学ぶ、2017年度に実施された研修プログラムである。現地で生徒たちは、内戦の爪痕の残る場所、大量虐殺のあった場所を視察するほか、現地小学校で小学生と交流したり、JICAや日本人学校でブリーフィングを受けたりするなど、様々な視点からカンボジア内戦や教育の現状を学び、実地で戦争や平和、教育の重要性を考える活動に取り組んでいる。

いずれも後期中等教育や高等教育の低年次を対象にした、中短期の海外での実践的な活動に取り組み、主体的に考え、行動することに重点を置いた学外学修である。

2.5 学生・生徒の学外学修成果発表が示すもの

学外学修成果報告発表では、それぞれのプログラムに参加した学生・生徒たちは、参加動機から渡航先での活動内容、その活動経験がその後の学生生活やキャリアビジョンにどのように影響を与えているかを報告した。

続く、パネルディスカッションでは、学生・生徒に質問をし、直接、彼らの声を聞くことを中心に進められた。各部でのそれぞれの発言を通じ、後期中等教育や高等教育の低年次といった段階で、いわゆる座学ではなく、学生・生徒が主体的、実践的な学外学修活動に取り組む意義を深く認識する機会となった。

彼らの発表、パネルディスカッションでの発言内容を総合すると、共通して次の点が挙げられる。

それは、あらゆる事情が日本と異なる現場での活動を通じ、困難なことに直面し、それを乗り越えようとする過程で得る学びや気づきが、それまでの考え方や意識、価値観の変化を導き、そのことが、自ずと中・長期的な視野から、自身の課題や目標、重要とすることを思考する力を養うことに繋がっている点である。

中期的な視野で捉えていると思われる要素は、例えば、自分に足りない能力や知識、補わねばならない経験、そして、それらへのアプローチについて分析する力である。そして、長期的な視野に繋がっていると思われる要素としては、キャリアビジョンに関することや今後の自分自身の心構え、行動指針といったことへ昇華させている点である。

学外学修を通じての考え方や意識の変化、中期的、長期的な視野で捉え述べていると思われる要素を、当日の学生・生徒たちの発表、発言から少し見ていきたい。

2.5.1 考え方や意識の変化について

これについては、異なるバックグラウンドの人々との触れ合いや異なる文化・環境での活動を通じて受けた衝撃により、既存の自分のスケールの再構築、日本で特に意識せずに捉えていた事柄の再認識、といったものが挙げられる。

例えば、次のような発言がなされた。なお、括弧内は発言該当学生・生徒の参加したプログラムである。

- ・専門性を深めるため理系学部に入ったが、どんな職に就きたいか、なぜその分野を学び、その後どうしたいのかなどについては、あまりよく考えてこなかった。今回の活動で、現地で様々な人と話し、将来の目標、それに向かって努力していることなどを聞き、自分自身も将来、人の役に立てる仕事がしたいと考えるようになった。(神戸 GCP)
- ・事業現場の実情を見て、現場の力だけでは解決に至らない実情があることを学び、現場の地道な努力は欠かせないものの、だからこそ、現場の苦労や限界を受け止める理解者が必要だと思うようになった (神戸 GCP)。
- ・現地で出会った日本人、現地の人と共に口を揃えて「教育さえあれば国は変えられる」と言われていたが、実際、学外学修活動を通じ、何よりも大事なものは教育だと痛感した (GAP)。
- ・戦争や平和に関する映画や本、メディアによって得られる知識だけで、戦争や平和について知ったつもりになっていたが、今回、現地で実際の経験者の話を聞き、また大虐殺のあった地の空気を吸った瞬間、今までの歴史が目の前に現れ、本当のおそろしさや平和や戦争の現実味を感じた。そして、自分自身が戦争や平和に対して、他人事になっている部分があるのだと気づいた (GAP)。
- ・現地に行く前は小学校教員になりたいという漠然とした夢は抱いていたが、研修行ってから、現地の教育格差を目の当たりにし、教育が受けられない子供たちにも教育が受けられるような支援をしたいと思うようになった (GAP)。
- ・「教育の重要性」を認識した。教育は、やはりコミュニケーションにおいて一番基本的な背景であると感じていたので、教育や社会政策が、どのように人間形成の下地になるかということは学べたと感じている (GSP)。
- ・今回の経験から、やはり小学校教員を目指したいという気持ちが強くなった (GSP)。

2.5.2 中期的な視野に立って述べられると思われる要素

多く挙げられたのは、自分に足りない能力や知識、補わねばならない経験といったものである。具体的には、学生・生徒からは次のようなものが挙げられた。

- ・日本に関する知識 (神戸 GCP)
- ・語学力 (英語力) (神戸 GCP,GAP)
- ・一般的な知識全般 (GAP)
- ・多国籍・多文化社会で過ごす中、日本人は相手を尊重する姿勢などでは多くの良い点を持っていると感じたが、一方で、個人の意思を伝えたり、主張する力が自分を含め日本人は劣っていると感じた。協調することは必要だが、自分の意思をしっかり伝えるという部分は今後、身につけねばならないと感じている(GSP)。

- ・自分の周囲にいる一人でも多くの人に研修での経験を伝え、多くの人が持つ研修国に対する偏見を変えたい(GAP)。

2.5.3 長期的な視点

長期的なものとしては、大きく分けて2つのものが述べられている。

一つは、将来の職業選択に関することだ。今回の発言の中では、現地体験から受けた衝撃により、これまでの考え方や意識に変化が生じたことに基づく発言が多い。また、目指すキャリアビジョンを見出している例もあれば、それを核として、職業選択肢の可能性を広げるために、現場で学ぼうとする力や観察力が変化している例も見られる。

- ・現地で流通している野菜栽培の実情を知り、安心できる野菜を届けられるよう、専門分野で社会貢献ができる仕事をしたい (神戸 GCP)。
- ・現地での経験が活かされ、新聞記者になることが決まった (神戸 GCP)。
- ・大学で教育問題の解決について研究し、発展途上国の教育を受けられない子どもたちが学校へ通うための支援をしたい。今回、現地へ行き、教育支援もいろいろなアプローチがあることを知り、現地での教員養成というのにも携わってみたいと思った (GAP)。
- ・小さいころからピアノを習っており、その音楽を活かして職業に就きたいという希望があり、また発展途上国に関わる仕事ができたらと思っている。今回、現地の教育制度には音楽や美術といった芸術系の教科がカリキュラムにないと知ったので、現地で音楽を学べる環境を作りたいと思っている(GAP)。
- ・今回、海外の教育現場を見て、授業スタイルも多様であることに感銘を受け、海外での教員にも関心を持った。日本の教育のみならず海外の教育も学び、海外での教員という選択肢を考えてみたい。教育を学ぶ者として、教育は大事だと感じているので、小学校教員ではなくても、学芸員といった社会教育の関係者など、何らかの形で教育者を目指したい (GSP)。

そして、もう一つは、今後の学修過程で、または一人の社会人として歩む上で、普遍的な心構え、行動指針となり得るものを見出している例も多く見られる。

- ・現場を大切にしたい：新聞記者にとって、やはり一番大切なのは現場を踏むことと言われる。どんなに文章がうまくても、1枚の写真には勝てないと言われる。つらい現場もあるかもしれないが、目を背けず当事者の目線に立った記事を書きたい(神戸 GCP)。

- ・現場に行くことの大切さ：実際に目で見えるもの、そして肌で感じるものは想像を超えており、教科書を読んだだけでは分からないことがある。/実際に自分の目で見える、確かめる大切さを知った (神戸 GCP、GAP)。
- ・柔軟性の大切さ：自分の型を相手にはめるのではなく、相手は相手の型、自分は自分と、自分の型を相手に押し付けず、相手の型を認めること (GAP)。

3. シンポジウムの成果

3.1 国際的なフィールドでの多様な学外学修成果の確認

本シンポジウムで発表やパネリストを務めた学生・生徒だけが、特別な成果を上げているのかと言うと、決してそうではない。

神戸 GCP に関して言えば、その他の参加学生も、海外で主体的に考え、学外学修に取り組む中で、困難や問題を乗り越え、現地事情を理解する過程で、新たな学びや気づきを重ねている。その中で思考や意識の変化が生じ、それを足掛かりに新たな境地を拓こうとしている点で、本シンポジウムで発言をしている学生・生徒たちと同じである。

このことに関しては、神戸 GCP で展開される学外学修活動が、参加学生にとって、社会で必要とされるソフトスキル、コミュニケーション能力を涵養し、渡航国の文化・習慣だけでなく自国の文化社会についての知識を持つことの重要性を認識させる契機となり、キャリア形成面で将来の選択肢に広がりを見出す機会となっていることは、別稿で述べた通りである (友松・杉野, 2018: 140-147)。

従って、本シンポジウムでは、神戸 GCP の意図した教育効果が得られていること、そして本学が目標とする課題発見に向けて主体的に行動する人材 (「課題発見・解決型グローバル人材」) の育成に着実に繋がっていることを示すことができたと考えている。

3.2 本シンポジウムの発信意義

神戸 GCP では、学外学修活動と学修成果に関する発信は、これまで学内向けに年 2 回開催する“神戸 GCP フェア”で集中的に行っているが、学外向けには大学イベントや大学広報誌で僅かに紹介するに留まっているのが現状であった。

今回、グローバル人材育成に向けた本学の特色あるプログラムに参加した学生による学外学修活動と学修成果の報告発表を軸にしたシンポジウムを実施することで、主催者の予想を超える反響があった。

反響の大きさは、当日アンケートからも読み取れる。

「印象に残ったプログラムについて」(複数回答可)の質問に、「プログラム参加学生による発表」が 41%と最も多く、「基調講演」が 28%、「パネルディスカッション」(17%)、ポスターセッション (15%) と続く。

学生の発表が印象に残ったとする理由については、一般参加者、大学教職員から多くの回答を得た。ここでは一般参加者、大学教職員と分けて、コメントの一部を以下に紹介したい。

<一般参加者>

- ・経験から学ぶ教育の価値について考えさせられ、今後の課題になっていくと思った。
- ・様々なプログラムで、学生がいろいろな学びをしてきていることに感銘を受けた。
- ・このプログラムの可能性や影響の大きさを感じ、すばらしい活動だと分かった。

<大学教職員>

- ・実体験に基づく発表には「力」があり、大変良かった。
- ・実際の経験の質が優れていることを確認でき、プログラムの価値を確信できた。
- ・プログラムに参加した学生さんが成長していく過程がすごく感じられて良かった。

このような学内外の反響からも分かるように、学生・生徒の発表、パネルディスカッションでの発言を通じて、本プログラムが取り組んでいる学外学修の効果を示すことができたと考えている。

また、本学では多数の海外プログラムを実施しているが、これまで、このような学生の学外学修の学びの成果を社会へ十分に発信してこなかったと思われるため、本シンポジウムを通じ、本学が目標に掲げる「課題発見・解決型グローバル人材」の育成の重要性を、学内外へ発信したことの意義は大きい。

3.3 今後の課題と展望

当日アンケートのコメントでは、一般参加者、大学教職員双方から、本シンポジウムで取り上げた学外学修プログラムについて、「必要不可欠なプログラムと考える。さらなる活動強化に尽力願いたい」、「継続してほしいと強く感じた」という声が散見された。神戸GCPは、次年度でAP5ヶ年事業の最終年を迎えるが、主な課題としては、次の4点挙げられるだろう。

それは、まず第1に、このような学外学修プログラムを一過性のものとして終わらせるのではなく、持続させるための実施体制を整えることが何よりの優先課題である。

第2に、神戸GCPは、全学的な取組であるものの、1・2年次生を対象学生としている。本プログラムに参加した学生たちが、ここでの学びを上位学年での専門の学修にどう繋げるか、あるいは留学、海外インターンシップといった長期学外学修へとどのように促進させるかという課題もある。

1・2年次に神戸 GCP に参加したので、上位学年での留学等の海外プログラムへの参加は不要、あるいは上位学年で留学をするので、神戸 GCP に参加しないという流れを作ってはならない。むしろ、1・2年次での神戸 GCP への参加が、さらなる海外での学外学修と、上位学年での長期学外学修の学びが関連し、相乗効果を発揮できるつながりにしなければならない。そのためにも、前述のような流れとしないよう学生に働きかけるとともに、上位学年でも、全学に開かれた新たな長期学外学修を展開し、単位として授与するシステム、あるいは低年次で長期学外学修に取り組んだ学生が、上位学年で、今度は低年次学生の長期学外学修の学修支援を行うといった仕掛けが必要だと考える。

第3に、そうした仕掛けを作る上でも、神戸 GCP に参加した学生がその後の学生生活にどのようなインパクトを及ぼしたか、長期的な学修成果について、データを収集し、その分析を基に、海外での学外学修プログラムの質向上を図ることも不可欠だ。

最後に、本シンポジウムは、学生の出席率が低かったことから、講演者やフロアから、「大学生や高校生にもこのシンポジウムの話を聞いてもらう」必要性について指摘があった。

これに関しては、低年次で主体的に取り組む学外学修そのものがまだ、大学生や高校生にあまり認識されていないように感じる。また、関心はあるものの、参加に二の足を踏む学生・生徒が多いのも現状だ。従って、このような学外学修への参加意義を、大学生、高校生に広く浸透させていくには、活動に参加した学生による発表機会をますます広げていく必要があると考える。

ただ、現実には、活動成果の発表を同一プログラム内で実施するには限りがある。これを打開するには、第3部でパネリストを務めた学生・生徒から「大学生がこうしたプログラムの参加体験を高校などへ発表しに来てほしい」といった希望が出されたように、附属中等教育学校と連携、また本シンポジウムのようにプログラムを超え、学内外の学外学修プログラムと連携し実施するという方法も考えられる。

「現地での体験を『発表』の形にまとめ上げることにより、その体験内容もより深まっていくことが分かった」というコメントがアンケートに見られた。参加学生による学外学修の発表は、参加学生自身が新たな気づきを得る機会を与え、主体的な学修や活動へさらに導く一方、まだ学外学修に参加したことのない学生・生徒に対しては、このような学外学修活動へ関心を高め、参加をさらに促す契機となると考えられる。

これらを喫緊の課題として、早急に取り組むことは、本学の目指す「課題発見・解決型グローバル人材」の育成をさらに牽引するプログラムとなると考える。

参考文献

河本達毅 (2018) 「我が国におけるギャップイヤーの活用と大学教育の質保証」(神戸グローバルチャレンジプログラムシンポジウム資料) 2018年11月3日。

阪野智一・友松史子「神戸グローバルチャレンジプログラムと学びの動機付け-Feel the Globe!Change Your World!-」澤邊潤、木村裕斗、松井克浩編『社会とともに創る新しい大学教育 長期学外学修で大学の何が変わるのか～12校の挑戦的な事例から考える大学教育の未来～(仮題)』東信堂、近刊。.

友松史子・杉野竜美(2018)「神戸グローバルチャレンジプログラム実施状況と成果 - 大学教育推進機構コースを中心に - 」神戸大学大学教育推進機構『大学教育研究』第26号、pp.131-147.